



Oxford 大学 滞在記 グリーンテンプレトンカレッジ

衛生学 准教授

西村 泰光

去る平成28年11月より3か月間、英国オックスフォード大学グリーンテンプレトンカレッジ (GTC) に留学して参りました。まずはじめに留学をさせていただきましたこと、本学園理事長川崎誠治先生、本学学長福永仁夫先生、副学長柏原直樹先生、所属長大概先生、ならびに運営委員会の先生方、お世話になりました皆様に心より御礼申し上げます。英国は私にとって初めての地であり、オックスフォードというその特別な土地での研鑽は、学問の域を超えて、大学の役割、大学の力を改めて考えることのできる、生涯忘れることのできない素晴らしい時間を私に与えてくれました。その一部を、そこから理解したオックスフォード大学の素晴らしさについて、こちらで少し紹介させていただきます。

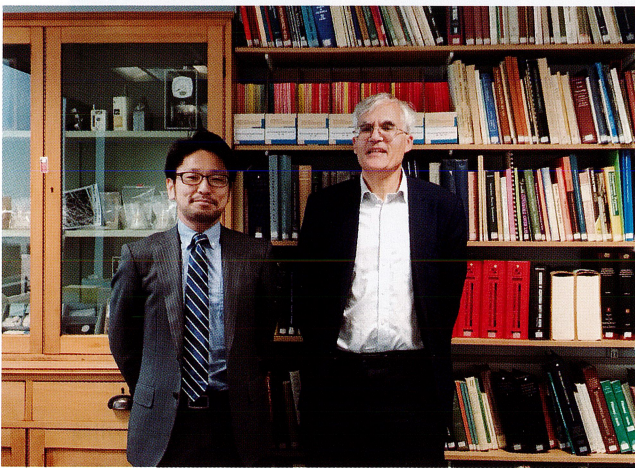
オックスフォード大学の特徴は、倉敷市倉敷地域に満たない僅か人口16万人の地域に30を超えるカレッジがひしめき、そのカレッジ群が一体となりオックスフォード大学を作っていることです。これを聞くと、大学群の連合組織や単位互換のような大学間互助組織をイメージ

されるかも知れませんが、これは実際に巨大な一つの大学なのです。お世話になったRichard Gibbons先生がおられる Weatherall Institute of Molecular Medicine においても GTC の教員だけでなく他のカレッジの教員も所内で様々な研究活動をしておられ、様々なカレッジから学生が来ています。すなわち、教育と研究の両面でカレッジは相互に密接に関わり合っています。この独自のシステムこそがオックスフォード大学のアカデミアとしての創造性と生産性を世界最高峰の質に高めている最大の理由であろうと考えます。

そのような中、私は GTC の fellow としての身分をいただき、すなわちオックスフォード大学の一員という名誉ある立場をいただきました。我々の研究の専門はアスベストなどの環境因子の免疫機能影響です。そこで、私はオックスフォード大学で日々開催されているあらゆる免疫学関連のセミナーを検索し、様々な研究所を訪問し講演を聴講し、またこの演者に直談判してラボ訪問を願い、研究に必要な情報収集を行いました。講演はどれもハイレベルな内容であることは勿論ですが、様々なカレッジ、様々な研究所の研究者が企画していることからその内容は分子からヒトまで幅広く、研究のアイデアを大いに刺激しました。

私のもう一つの願いは、アスベストなどの労働衛生に研究領域を持つ研究者と出会い交流を深めることでした。しかし、私自身の努力ではオックスフォード大学内で候補者を見つけることはできないでいました。これについて Denise Leivesly 学長先生にご相談したところ、迅速に関係者にメールで問い合わせさせて下さり、Botnar Research Centre の Alan Silman 教授を介して最終的にマンチェ

スター大学 Centre for Occupational and Environmental Health の Raymond Agius 教授をご紹介していただくことができました。リバプールでの British Society of Immunology に参加することをすでに予定していた、マンチェスターはリバプールから僅か30分という距離にあることから、学会期間内に Agius 先生を訪問することとしました。案内された小さな図書室で最初に目に入ったのは本棚にズラリと並んだ日本産業衛生学会英文誌である Journal of Occupational Health でした。そして直ぐにガラス戸棚に保管されたアスベストを見つけ、何かやっと仲間に会えたよ



温かく迎えて下さった Agius 教授との記念撮影。感謝。左手戸棚の中段にアスベストが並ぶ。



オックスフォードでの移動に欠かせないバス交通。倉敷もバスが沢山走る街になってほしい。

うな気分となりました笑。Agius教授は大気環境と喘息に関する研究成果をはじめ、種々の情報提供をして下さいました。その中で、私がナノ毒性研究にも取り組んでいることを伝えると、所内の関連する研究者をご紹介下さり、さらなる情報共有をすることができました。

このような私の当地での活動の一端からも御理解いただけますように、オックスフォード大学ではカレッジが効率的に連結され、研究活動が(時には大学を越えてまでも)迅速に活性化する状況が作られているのです。また、この素晴らしい状況をサポートしているもう一つのパーツが各施設に設置されているカフェテリアです。カフェテリアはたいてい施設のレセプションを過ぎた最初のスペースに広く在り、教員・学生は毎朝そこを通り自然とカフェを手にとりソファに腰掛けます。従って、何気ない日々の会話、セミナー後のディスカッションがそこで自然に生まれます。この、部門や専門性を越えたLifeとScienceが一体となった空間の存在がインスピレーションやセレンディピティを生み、高度な創造性の源泉となっているのではと考えます。

そしてさらにお伝えしたいことは、オックスフォード大学が質の高い社会意識、ひいては街作りにも影響していると感じる事です。毎週開催されるカレッジディナーでのLeivesly学長先生のスピーチは国際的な時事の問題や大学としての社会的活動にもおよびます。学長を頂点とした教員・学生の高い意識はそれぞれの接点を通じて「社会斯く有るべし」という無言の社会教育と成っているように感じます。例えば、当地では高齢者や車椅子利用者、ベビーカーを押す女性が自由に乗り降りでき



幾度となく参加したカレッジディナーもまた忘れられない思い出の一つ。右手は、8年前に本学衛生学に留学に来た Johannes Setz 先生。ウィーンから訪ねてくれた折り、一緒に出席した。有り難う!

る最新式の大型バスが縦横無尽に深夜まで走り、運転手はみな親切で、市民が不自由なく移動できる環境があります。このような社会の質に少なからず果た

してきたであろうオックスフォード大学の役割を感じる時、大学の務めとは何か、改めて考えさせられます。私も一人の大学人として、オックスフォードでの日々を振り返り、学問の研鑽、教育の充実は勿論のこと、社会貢献の重要性について今一度考えてみようと思います。

また余暇の活動にも少し触れておきますと、バーミンガムでの大規模な Christmas market、岡崎選手の所属する レスター・シティのプレミアリーグゲーム、ロンドンでの博物館などの観光地と Lion King のミュージカル、またビッグベン脇での New Year 花火、などなど沢山楽しませていただきました。それらも含め、全てが楽しく素晴らしい日々でした。

末筆になりますが、お世話になりました Lievesly 学長先生はじめ GTC の先生方、関係各位に改めまして厚く御礼申し上げます。当地で、"Kawasaki Fellow" という言葉を何度も耳にし、本学園と GTC との特別な関係性を紡いでこられた両大学の先生方の御功績に感謝の念を禁じ得ない思いでした。Gibbons 先生、研修内容についてのアドバイス、楽しい Pub の時間を有り難うございました。Ale ビールは最高! 笑 Turner 先生、Christmas day のパーティに家内と共に招待して下さい有り難うございました。子供たちとの演奏、楽しかった。Flemming 夫人には flat での生活に当たり本当に良くしていただきました。English@Oxford (英会話学校) の先生方にもとても感謝です。皆様へ、心からの感謝の気持ちを表し、滞在記を結ばさせていただきます。本当に有り難うございました。



バーミンガム、Victoria Square に現れた進撃のサンタクロース。子供が泣きそうなほどクオリティーは高い! 笑